

---

D . S . m // I V...

神羅和刃

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

D・S・m / / I V . .

### 【Zマーク】

Z3932F

### 【作者名】

神薙和刃

### 【あらすじ】

「現実が、虚構に侵食される」『対人憎悪症』である伊橋善親と惨殺優等生の一ノ瀬英里。そして数多のパラノイア（妄想狂）と我々『健常者』を巻き込んだ『狂気異常アドベンチャー』…とりあえず言えることは、まともな結末を期待するな。

俺は異常者だ。

自覚できるほど、末期の異常者だ。

治療のしようが無いくらいの異常者だ。

俺  
伊橋  
善親は『対人恐怖症』ならぬ『対人憎悪症』に陥っている。

とにかく視界に移る有象無象。

別名『他人の人間』が憎くて醜くて腹立たしくて哀れで無様で阿呆らしくて仕方が無い。

昔から、そう、生まれた瞬間から訳も分からず負の感情を他人に抱き続けていると云つても過言ではない。

だがそれはそこ

俺はもう高校2年。

対人憎悪症であっても人と最低限の付き合いは出来るようにはしている。

幸いに我が外見は平均よりはそこそこ上らしく、『根暗』やら『孤独』なんて不名誉な評価は無く、周囲の人間は勝手に『一匹狼』だの『人付き合いが苦手』だと勘違いしてくれる。

いや、一匹狼云々は間違つてはいないかも知れないが、何か、説明は出来ないが何かが違う気がするので上記のような言い回しにして

おぐ。

しかし、異常者であるのは俺だけかと思っていたけど、存外そうでは無いらしい。

世界は広く、そして狭かつた。

まさか俺と甲乙つけがたいほどの異常者が、俺の近辺にアロアロいるなんて思いもしなかった。

だが、ある意味では『必然的』だつたかも知れない。

今は、そう思つてゐる。

【話は次の頁まで遡る。異常者と出逢ひ覚悟が出来たら逝け】

!-COURTION!

この先からはあなたの健常な精神を余すことなく汚染する可能性がある文体となつております。

- ・健常な方や異常な方
- ・体調の悪い方
- ・現在疾患をお持ちの方

上記の方には刺激が強すぎる可能性が御座いますので是非是非閲覧

してください。

夏も過ぎ、肌寒くなつた渋谷。

それでも行き交う人々の雑談でビートなく蒸し暑さを感じている。

いや、

蒸し暑さではなく苛立ちだらうか。

対人恐怖症と呼ぶには些か不適切な『対人憎悪症』を患つ自らにとって渋谷は地獄だ。

談笑している女共

インターネットの某掲示板発祥のスラング（悪口）で云うところの『スイーツ（笑）』をとりあえず思い切りぶん殴りたい衝動に駆られる。

苛々している処にあの無遠慮な馬鹿笑いを聽かされるのは、結構くるものがある。

そんな不快感を抱きながら、街角で見知った顔を見かけた。

少し薄い黒色 アッシュユーブラックよりは少し濃いぐらいの艶やかな黒髪に、くりつとした瞳、小柄な顔に愛嬌のあるハ重歯 と、如何にも漫画の万人受けしそうなヒロインのような少女だ。

名前は

『一ノ瀬 英里』（いちのせ えり）

確かに成績優秀、品行方正と完全無欠の女の子とクラスの奴らが噂してた記憶がある。

とはいえ対人憎悪症である俺にとってはそんな下馬評には興味無く、寧ろそんな完璧超人ほど嫌気が差す。

嫉妬と云われれば悩むが、よく分からないので別に肯定しても問題は無い。

そんな

まあどんなと云われても説明が面倒なので割愛するが

彼女が裏路地に等しい、入り組んだ上に奥まった場所から姿を表したことには疑問を感じた俺は、人混みにぶつかることも厭わず彼女が出てきた場所へと移動した。

『常識』と言つ名の『ゲスの勘ぐり』で考えるなら、援助交際だとか、頭の足りない不良気取りの男に連れられて強姦されたとか、色々理由は思い浮かぶが……強姦の線はNOだと思つ。

路地裏から出てきた彼女の顔は無表情だつたし、拳動不審な点も（遠目からみた限りでは）見当たらぬ。

まあ彼女が『社会常識など様々な観点から、不適切だと思われる語句が含まれていたので、こここの文は削除しました』『なら話は別だが

なら援助交際だろ？。と云われればNOだ。

ただしそれは状況を鑑みた論理的見解からではなく、あくまで自ら

の希望だ。

俺（異常者）は『常識』と言つ名の、『多人数の意見を無理矢理押し通すための誤魔化し』を最も嫌う。

だから『常識』で收まる考え方など持ちたくない。

だからといってDON（インターネットスラングの一種、常識の無い人を意味する）と一緒にされでは困る。

少なくとも俺は駆け込み乗車だとか、狭い電車内で足を組んで座つたり大股開いて座つたり、道に唾を吐いたり、自転車の一人乗りetc. . . など、醜態を晒すよつた真似はしていない。

：話が逸れた。

つまりは、俺は彼女が出てきた路地裏の向こうに『非日常的な何か』を渴望している。

渴望と共に、『常識を打ち壊す何か』があると予感している。

逸る気持ちを抑え、俺はその入り組んだ路地へ足を踏み入れた。

「肉が食えなくなるな」

路地裏を見た俺の感想がこれだ。

周囲は恐ろしい有り様と化している。

乱立したビルにより日の光が遮られ、僅かな光が差す路地裏。地面にはおびただしい血溜まりがあり、俺の靴を濡らす。

無論壁にも血は飛び散つてはいるものの、どちらかと言えば地面の血を有していた被害者のモノとおぼしき、肉片や臓物

ヒダの折り重なり方や形からすれば 理科の教科書にある、人体断面図に記載されている小腸だろうか

が張り付いている。

血溜まりの中には、引き裂かれたかのようにグズグズの肉や、骨を剥き出しにした『人だったモノ』が存在している。ペースト状になった肝臓から何やら汁が噴水のように吹き出している。

臓物から湯気がほかほかと上がり、鬱陶しさを倍増させる。

これは後始末が大変だらうな……と俺は考え、さっと立ち去ることを選択した。

にちやにちやと靴の裏に溜まった血で足跡を付けながら、俺は路地裏を移動する。

とりあえず表路地に出るのは避けたいが、逃げなければヤバい。状況的に俺が被疑者に仕立て上げられる。せめて表路地に移動する際に、誰にも見られなければ良いが……と思いつながら、俺はある疑問を抱いていた。

まずあの凄惨な殺人現場をプロデュースした犯人は、（あくまで状況的判断に基づけば）路地裏から出てきた『一ノ瀬 英里』だろう。

だとすれば謎が結構ある。

幸いに路地の奥にドアがあった。

俺は服の裾で手を覆い、ドアノブに手をかけた。

ギギ…と鋸びた金属特有の擬音を発し、扉は開いた。

中は暗く、廊下の隅に蜘蛛の巣がある点から考へるに廃ビルだろう。さらに床にはそれほど古くはない空き缶がある。

頭の足りない奴らが溜まり場にでもしているのだろう。

幸いにして脱出経路は確保出来た。

後はこの廃ビルから目立たないように脱出するだけだ。

俺は側にあつた椅子に座る。

カバーが剥がれ、中のバネが丸見えだ。

ギシリ、と軋む音を聞きながら、俺は先程のグロ肉現場を回顧する。

まず動機…は、どうでも良いだろうな。

積年の恨みだろうが、突發的な犯行だろうが関係はない。

凶器……。

あのグロ肉を素人目に観察するに、もの凄い力で引き裂かれていた。

素手…では、まあ出来なくはない。  
ナイフとかでも時間はかかるが可能だろう。

時間…については推測の仕様がない。

もしかしたら何時間も前に行われていた可能性も有るわけだ。

俺は『彼女が路地裏から出てくる時間』しか知らないから。

問題は彼女の様相だ。

俺が見た彼女は

『何の変哲もなかつた』

返り血とかが無いのは極めて不自然だ。  
服を着替えるにしても、地面に血溜まりを作るほどの返り血なら、  
髪や顔にべつたりと付着する筈。

顔などを何かで覆っていたならまた別だが、服といい、個人を特定  
できる可能性のある品を犯行現場に残すだろうか？

見た限りでは

『何かを隠せる所は無かつた』

現場には『凶器らしきものも無い』訳だし、彼女が『凶器を隠し持  
つている』可能性がある。

しかしそれなら『返り血がついていない』謎が残る。

……謎だ。

まあ暫し考えたところで、それがどうしたと言ひ結論に至る。

俺には全く関係は無い。

通報の義務を果たしてやる道理も無い。

他の人間が通報するかどうかも、どうでも良い。

俺は立ち上がり、廃ビルの窓から、廃ビルに面した路地の様子を伺う。

幸い人通りは少ない。

廃ビルに注目している人間も居ない。

タイミングを見計らつて俺は廃ビルから脱出す。

……しかし、どうするか。

渋谷で殺人なんざ珍しくはないが、あれほど凄惨なモノはなかなか無いだろう。

興味はそそられる。

しかし、首を突っ込んでちょんきられてはたまつたモノでは無い。

……やはり一ノ瀬 英里が事件の鍵を握っているのか。

だが不用意にカマかけを行い、口封じを企てられるなんてBAD  
ENDは嫌だ。

：無かつたことにするか。

事なきれ主義は人間として最低の行為とは思うものの、不可解な事件への恐れや面倒くさがはばかり、俺はこの事件を『見なかつた』ことにしてしまうと企てた。

否、

企てたかった。と云うべきだろうか。

通りに出ようとした刹那、俺の背筋はぶるりと震えた。  
鳥肌が立ったかのような感覚。

ホラー番組を見、殺人鬼が不意に現れた瞬間にブルッときた感覚と云えば分かり易いだろうか。

そして俺に注がれる視線に、俺の足は、俺の『脱出しようとする意志』は阻まれてしまった。

俺の背後にある暗がりに、何かが浮かぶ。

中空に2つ、まるで人の眼だ。

いや、まるで では無い。  
人の眼だ。

くじくじっとした、はっきりとした眼。

やがて暗闇に輪郭が浮かぶ。

カツーン、カツーン。と靴が地面を穿つ音が大きくなつてゆく。

アッシュュブラックの髪。

愛嬌のある八重歯。

「一ノ瀬…英里」

暗がりから現れたのは、件の一ノ瀬 英里。

無表情である彼女は俺の言葉に無機質な微笑みを浮かべている。

異様だ。

表情はまず置いておく

が、異様なのは

彼女が手に持つ『それ』

流線を描く、独特のフォルムを持つ巨大なナイフ。

いや、大剣か？

彼女の身の丈程有ろうかと言うその刃物はナイフのような形をしているが、クレイモアやツヴァイハンダーのような大剣と同じにしても差し支えは無いだろう。

「見ちゃったんだね」

不意に彼女が呟けば、瞬間に大剣の切つ先が眼前に据えられる。

一瞬だ。

まるでフィルムのコマとコマの間に刷り込まれたように存在していた。

彼女は身の丈程有る大剣を涼しげな顔で、片手で保持している。異常な筋力、なんて言葉で片付けられる話ではない。しかも大剣を振るモーションすら無いし、あれを振る事で必ず発生するはずの空氣の乱れや、風切り音すら感じなかつた。

「……」

凍りついた。

彼女の異様さや大剣捌きに見入つてしまつた。

殺される。とか

彼女が何故あんな大剣を持っているのか。とか

そんのは

どうでもしい。

俺は間違なく魅力を感じていた。  
彼女にでも、  
彼女の持つ大剣にでも、  
今この状況にでもない。

では何に魅力を感じたのか？

解らない。

だがそれで良い。

ふと沸いた取り留めのない感情に、一々理論を求めるのは健常者の  
することだ。  
俺は異常者だから必要ない。

廃ビルの、ガラスの無い窓から光が入る。

その光が彼女を照らし、陰影のコントラストを色濃く分ける。  
その時だけは無機質に見えた彼女の笑みも、不敵で不気味なものに  
見えた。

とりあえず  
どうするかな。

【次回を待て】

&gt;:&gt;:2 それなんて妄想?

脇から差す日の光で顔の右側が微妙にあつつい。  
そのくせ廃ビルの中は換気すらままならない場所なのにひんやりしている。

私は『剣』を突きつけている。

突きつけている相手はクラスメートの伊橋 善親。  
確かに『一匹狼』な感じがするつて友達が言つてた。  
少しシャギーを効かせたストパーの髪に、標準より細めの体。普通  
よりはまあ良さげな顔といった感じの人だ。

そんな善親くんは私に『剣』を突きつけられても微動だにせず、私  
を見つめている。

肝が据わっているのか、ビックリが度を超してフリーズしているの  
か、

多分どちらも違うと思う。

彼は『興味』を抱いている。

私が、

私の『剣』か、

それとも別の『何か』に。

「…消すのか？」

「ん？」

「俺を消すのか？」

ワンテンポ置いてから私は漸く理解した。

多分善親くんは、『私に殺されるかもしれない』と思つていたんだ  
るつ。

やはり彼は『見ていた』

遡ること数分前、人々の中、私は彼の視線を感じていた。  
私がある路地裏から出てきたのを田撃したのだろう。

一匹狼と評価されている彼の事だから、対した関心も持たずに行く  
だろうと思つていたけど、嫌な予感がしたから彼を『監視』してい  
たら案の定、

彼は私が出てきた路地裏へ向かい、見てしまった。

路地裏の奥に存在している『グロい血肉の塊』（にんげんだつたも  
の）を。

そして彼の逃走ルートを予想して『待ち伏せ』していたら案の定、

彼はこの廃ビルに現れた。

そして今の状況

私が彼に『剣』を突きつけている状況に至っている。

ただ解らないことがある。

彼は『私が見えていた』にも関わらず、あの萌え萌えなグロ肉の『  
存在意義』を理解していない。

そして私の『剣』の事も理解していない。

『剣』を出している時の私が『見える』のなら、『剣』の事もあるの

グロ肉の『存在意義』も理解している筈だ。

「別に、殺さないけど…どうして？」

「なに？」

「だって、『見えていた』んだよね？私とかあのグロ肉ちゃんとか」

黙つて善親くんは頷く。

だけどまだ納得していない。って言いたげな表情をしている。  
もしかしたら、彼は『見える』けどまだ『持っていない』って人なのだろうか。

…うーん、稀にそんな人が居るとは『聞かされていた』けど…。

「善親くん。この『剣』の事、全く知らないの？」  
「…知らない」

『剣』が見えているのに、そんな健常者のような反応をされでは困る。

私は剣を抱き上げ、何から話すかを考え始めた。

さて、まずはこの『剣』の事から話すかな…。

「先ずはこの『剣』の事から話すね」

「分かった…」

意外と冷静だ。

それとも必死に状況を理解しようとしているのか、この状況について言及する姿勢は無いようだ。

「Iの子の名前は『・EXE』って言うの」「『・EXE』…まるでプログラムみたいだな」

彼の言葉に私は頷いた。

彼のツッコミが正しいからだ。

確かに見た目は変わった剣だけど、プログラムと書いて差し支えは無いだろ？

これを持てば、『渋谷内限定』であらゆる現象に『干渉』する」とが可能になる。

：例えば防犯カメラに見一つでハッキングしたり、物理演算に入れて壁をすり抜けたりすることも可能だ。

自らの姿を見えなくしたりすることも出来る。

「つまりね、『・EXE』の所有者は『渋谷内に限り、あらゆる行為を行つことが出来る』の」「…凄い、な」「疑わないんだね」「まあね、そんな物が田の前にあつたら信じざるを得ないって」

理解が早くて助かる。

普通の人間だつたら夢だの幻覚だのって騒ぎまくるから始末が悪い。  
『ありのままの出来事』ありのままに受け入れる『事ができない健いじ  
常者』つて最低だからね。

「ただ『.EXE』にも制約が幾つかあるの。チートめいた力つて  
訳じやないから」

「ふむ…。まず『渋谷内でしか使用出来ない』ってのかな?話から  
して」

私は頷いた。

彼は良い意味でも悪い意味でも『賢い』。

異常な状況に流されず冷静に言葉を拾い、分析している。  
だとすれば色々気を回さずに済みそうだ。

「あと、まだ制約が幾つかあるんだ」

## 制約その2

『.EXE』の所有者は様々な物理法則を無視したチートを行え  
るが、別の『.EXE』所有者にそのチートは通用しない

「例えば、私が『.EXE』を使用して姿を見えなくしても、別の  
『.EXE』所有者からは私の姿は丸見えつてこと

「ふむ……なら、おかしくないか?」

「だよね、君は…」

「ああ、『.EXE』を所有していない」

彼は自らの矛盾に漸く気付いた。

彼は『.EXE』所有者では無いのにかかわらず、『.EXE』のチートが通用していなかつた。

その事については色々考えがある。

彼がまだ『.EXE』を発現していないとか。

…でも、多分それは無い。

『.EXE』の発現は突発的なものであり、突発的なものではないから。

「なあ一ノ瀬」

「なに? どしたの?」

「『.EXE』って突発的なものなの?」

「…うーん、違わないけど違う」

『.EXE』が発現するタイミングはわからないけど、発現可能になつたら、頭の中で『あ、発現出来るなー』って予感めいたものが予め閃く。  
つまり、ホントに急に出せるものじゃない。

「使い方もその時にパツて頭に閃くんだ」

「成る程、突発的ではないけど突発的…か。俺にはまだ無いかな」「だからこそおかしいんだよ？善親くん」

私は『・EXE』をしまつと、後ろに手を回しづつこのように前かがみ体制になつて、上目遣いで彼を見つめる。

「キミは異質な状況下の中でもさうに異質を放つ『異常者』ってことになるんだよ」

ドスを効かせた台詞。

でも彼は薄ら笑いを浮かべていた。

「良いね、異常者の中の異常者。そそられるよ」

不敵に笑う彼はある意味では予想の範疇に入つっていた。

### 制約その3

『・EXE』は異常者にしか発現しない

つまりは『・EXE』に関わる存在は全て『異常者』ということとなる。

もちろん、優等生と言われている私も。

「それで、一番聞きたいことがあるんだけど

「なに?」

「俺達異常者は『.EXE』を使って何をすればいい?」

「何もしなくていい

「…何だつて?」

『.EXE』を所有しているからと言え、所有者同士で殺し合いつな  
んてルールは無いし、困っている健常者を助けるってルールもまた  
無い。

逆も然り。

『.EXE』の所有者同士で殺し合つもよし…

困った健常者を助けるもよし!

困った健常者をせりひに困らせるのも良いし!

チートを使って女の子の意識にハッキングして合法的に『『』』の一  
文には、社会的觀念から不適切と思われる要素が含まれていたため  
削除しました》》するもよし!

『.EXE』所有者の数だけルール(あそびかた)が存在している!

「素敵だな」「素敵だよね」

彼は心底この状況を良しとしているようだ。  
流石と言つしかない。

「一ノ瀬は何を楽しんでるんだ?」

「コレクション収集。路地裏のグロ肉ちゃん見たよね? あれの写真  
を撮るの」

「あれの?」

私は異常者だ。

なぜならグロ肉の画像集に性的な快感を覚えるからだ。

最初

確かに中学に入り立てのころだったかな

インターネットで偶然グロ画像を見つけた私はあまりの凄惨さにシ  
ヨックを受けた。

そして急いで画像を閉じトイレへ駆け込んだ。

吐き気を催した訳じゃない。

劣情を催した。

つまりはエッチな気分になつたのだ。

だつて仕方がない！

内臓は愚か直腸、脳髄は丸出しで肉なんか散乱していて原型を留め  
ていなーい！

卑 猥 に も 程 が あ る ！ ！

あんな…あんな無修正画像を見せつけられて、エッチな気分にならないのがどうかしている！

あの画像で三回は絶頂っちゃった覚えがある。

とりあえず親に隠れてグロ画像を収集している毎日が続いていたけど、何時しかネットでは満足出来なくなつた。

血が滴る生肉もふもふしたいのぉつ！

グチャグチャの内臓の匂いクンカクンカしたいよおつ！  
グロ肉グロ肉うーづわあああああああん！

「成る程、なかなかの異常つぶりだな」

思いの丈をぶちまけた私に拍手する善親くん。  
引いていなーいってところで彼の異常つぶりを垣間見た。

「『 .EXE 』を使つてるから死体も見えない、私も見えない。さ

らに明らかにDQNな奴を選んでグロ肉にしてるから地球にも優しいしね」

「成る程、個人の欲求と世界平和が同時に実現できる訳だ」

「うん」

『.EXE』は正に魔法の道具。

私の願いや、世間の皆さんのが願いを叶えるツールだ。世間の皆さんの願いはもちろん『DQN』の絶滅。

頭の悪さとかはどうでもいいんだけど、人に迷惑かけて悪びれないような奴らは死んでも良い。

DQNの親だつて、大助かりだ。

子供のせいでの世間体が汚されずにする。

さらに子供が死んで悲しんだフリをすれば、

「ああ私はこんな異常な子供にこんなにも愛情を注いで…なんて良い親なんだ！」って自己満とい

「あの親は最後まで子供を愛している立派な人なんだ」って世間の評価も得られる。

だからって人殺しは人殺し。

私は正当化しない。

私は欲求のために人を殺す最低の人種だ。

その罪を良しとはしないけど、そんな私の人格は悪いと思ってない。

矛盾してゐる

でも私は異常者だ。

健常者の視点から評価されてもね。

とりあえず

グロ肉たん萌え―――！

【次回を待つてね?】

& acht;-& acht;-3　だめだ』の女…はやく何とかしないと

多種多様の花が咲き乱れる温室。

シクラメン、カモミール、バンジー、忍冬。

辺りはガラスに覆われ、花に囲まれたフロアの中心には、白く染められた円形のテーブルに椅子。

椅子には男が腰掛けている。

白く染められたジャケットにパンツ。インナーは襟元を開けた黒いYシャツ。

所々跳ねた金髪に涼やかな目線。

いかにも『氣障っぽい』という印象を抱かせるいでたちをしている。

男の向かいには、車椅子に腰掛けた少女。

肌は病的に白い。

プラチナブロンドのボブカットに、フリルのついたワンピース。

目はきつく閉じられていた。

恐らくは盲田だろう。

その少女の前に置かれたティーカップに、アールグレイが注がれる。執事の如く振る舞う男に、盲田の少女は一礼を返した。

湯気が立ち上るアールグレイを、口をそばめて息を吹きかけ冷まそうとする少女を見て、男は申し訳なさそうな表情を浮かべる。

「申し訳ありません。もう少し温度を低めにしてから煎れるべきで

した

「いいえ『枢機卿』。貴方はこの紅茶を、いつある事を『最善』として私に差し出した。どうしてその真心を否定する」ことが出来ましょうか」「

罪を赦すような、柔和な微笑みを浮かべる少女に『枢機卿』は感涙を流し、頭を垂れる。

そんな『枢機卿』の様を、まるで見えているかのように盲田の少女は静かにクスクスと笑う。

「『枢機卿』。予定通りの方は一ノ瀬さんと接触したようですが、まだ兆しは見られないのですか?」

少女の問いに『枢機卿』が頷けば、少女は哀愁漂う笑みを湛え、アルグレイを一口飲んだ。

カップをテーブルに置いた少女は、そばにあつた書物を手にする。

表紙に記されたタイトルは『新約聖書』

『新約聖書』を開いた少女は盲目であるにも関わらず読んだ。

歌うように内容を読み上げた少女。

ピアノの鍵盤を叩くかのように、軽やかにページを捲る指は『イスカリオテのヨダ』を記したページで停止していた。

「『枢機卿』」

「はい」

「ユダは『天に坐す父の子』を裏切つたとき、何を想つていたのでしょうね」

少女の問いに答えあぐねている『枢機卿』に少女は微笑みかける。少女が温室の外に存在している花に目を向ければ、花々は身を震わせ、まるで少女に贊美歌を捧げるかのように花びらを散らす。

儂げに花びらを散らす花々を見つめ、笑みを浮かべる少女。

そして静かに『新約聖書』を閉じれば、『枢機卿』へと差し出した。

「偏に『愛』が、ユダを裏切りへと走らせたのです」

「『愛』が？」

「そう、伊橋くんが人々を憎むのと同じです」

母親のように、優しく諂ひじた少女に『枢機卿』は訝しげな表情をする。

「『愛』故に憎しみが生じるのですか？」

「ええ。強すぎる光が濃い影を生むように、強すぎる正の感情は強すぎる負の感情を生み出してしまう」

愛とは何か。

柄に無く考えた時期がある。

それは相手を尊重することか。

相手を律することか。

相手と共に生きて逝くことか。

相手と傷つきあうことか。

どれも偏に、愛を搔い摘んで表した言葉だ。  
だからこそ俺は、よくわからない。

人間は自分勝手だ。

人間は利己的だから、自分に害が無ければ何処までも他人には無関心でいられるものだ。

人間は所詮死ぬときは愚か、本当に大事なときはいつでも独りだ。

人間は傷付くのは嫌がる生き物だ。

嗚呼、どれもこれも矛盾している。

愛とは矛盾なのか、矛盾が生じる程あやふやな物なのか。

だから俺は一生人など愛せまい。  
そう思った。

「伊橋くん？」

俺に声がかかる。

一ノ瀬から呼び掛けられ、俺は我に帰った。

渋谷駅の前

巨大なビジョンの下に備えられたガードレールに寄りかかり、雑多な人通りに苛々しながら俺は彼女に返事を返す。

「 どした?」

「 どした? ジやないよ。これから何するか決めようって言ったの、

伊橋くんだよ?」

そうだ。

EXE・の力を知つて以来、俺達はその力を何に使つかを決め倦ねていた。

一ノ瀬は相変わらず『萌えグロ肉収集』に精を出していくらしげ：俺にはどうも、使い方など思いつきはしない。

と言つか

EXE・自体が存在していない。

存在していない力を以て何を企むか…。  
これじゃ中二病（叶わぬ夢に逃避する人間）の奴らと全く変わらない。

馬鹿らしい。とは言わないが、虚しい。

限定的ではあるが、人は愚か空間にまで干渉し、自らの思つがままにする。

それは、神の御技だ。

ここまでもると疑問は尽きない。

誰がEXE・を造ったか。  
何の目的で造ったか。

何故第三者に、それほどのオーパーツを配布したか。  
それをばらまいて、如何なる結末が起るのか。

全ては『神のみぞ知る』ってか？

やつこいつ考えている内、何やら奇妙な違和感を覚えた。

別に頭の中の、取り留めのない疑問が解決した訳ではない。  
もつといひへ、根本的な…。

俺は周囲を見回し、ようやくその『違和感』に気がついた。

「人が…」

「居なく、なっちゃってるね」

今まで、地に落ちた溶けかけの飴にたかるアリの様に、鬱蒼と存在していた人間達が、いつの間にか影も形も無くなっていた。

無人の渋谷駅前には、俺と一ノ瀬の二人のみ。

いや、三人だ！

俺と一ノ瀬の目の前に、まるでシールを貼るかの様に、前触れなく現れた一人の女がいた。

さらさらと風に靡く、ロングヘアーに切りそろえられた前髪（いわゆるパツツンヘアー！）  
キリリと上がる眉に、涼しげな、されど鋭い刀のような眼光。

間違いない。

コイツ武士道女だ！

武術一筋！

彼氏無し、必要なし！

正義一貫、曲がつたことは大嫌い！

そんな手合いだ！

その武士道女の腰には刀。

かたな？

銃刀法違反ですよ。

刀袋無しで、鞘無しで抜き身の刀身晒したまま腰に差すなんて。

と、正常な輩は申すだろうが、俺と一ノ瀬には大体察しがついた。

大量の人を消し去る力。

そして腰に下げられた奇怪な武器。

この武士道女もまた

EXE・使いだ。

「貴様ら」

武士道女が口を開く。

貴様ら呼ばわりだ、俺達に良い感情を抱いていないのは見え見えだ。

武士道女は腰に下げられた日本刀型ＥＸＥ・を取り、中段に構える。

分かり易くいえば、よく剣道とかで見る構え方だ。

「この力で惨殺事件を起こしているのは貴様らだな。」

「…見てたの？」

一ノ瀬もＥＸＥ・を発現し、構える。

ピリピリと肌の表面に静電気が走ったような感覚に陥る。

これがよく漫画で有る、『殺氣のぶつかり合い』って奴だろつか。

武士道女はＥＸＥ・を構え続け、息を吸い込む。

そして

「罪無地一般市民を殺すとは、不<sup>レ</sup>辯を十万！

さらば殺された者共の輝ける明日を奪つておいて悪びれることない  
その態度！

天が許してもこの私が許はしない！

我は刀！一振りにて悪を断罪する正義の使者！

まあ悔しいー己の所業を！

悪鬼羅刹は我が手で屠ふる！

氷室優奈

う推して参るつ……

……

どうしようつ、イタい。

ちごこちにイタいよ武士道女。

【待つのだ、次回つ！】

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3932f/>

---

D . S . m // I V ...

2010年10月10日02時17分発行